

(様式2)

令和4年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
4	川崎市立大師小学校	梶 康子

学校教育目標	今年度の重点目標			
○豊かな心を持ち、たくましく生きる児童の育成 【自立】「進んで学ぶ子」 【共生】「思いやりのある子」 【創造】「明るく元気な子」	○学習指導要領に則った指導計画を推進します。 ・分かる楽しい授業 ・基礎・基本の定着 ・校内研究の充実 ・学習環境の整備 ・GIGAスクール構想の推進	○「ひと」「もの」「こと」とのかかわりを大切にします。 ・かかわり合いの充実 ・命、心の教育の充実 ・支援教育Coを中心とした特別支援教育の充実及び外部機関との連携 ・キャリア在り方生き方教育の推進	○学校教育目標を具現化するため、全職員で全児童を育みます。 ・全職員での情報共有 ・安心して楽しく過ごせる学校づくり ・校内環境の整備 ・体力づくりの推進	○開かれた学校づくりに努めます。 ・学校公開、学校評価の実施 ・GIGAや情報配信システムの有効活用と情報管理 ・地域との交流、連携、幼小、小中との連携

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
進んで学ぶ子	よく考え、よく聞き、学び合うことができるように授業の工夫をしている。	学習のルールや進め方を確立させ、学び合いの場面を意識して授業を行うようになってきた。学校評価でも、児童及び教職員では、8割以上が肯定的に捉えている。進んで勉強していると感じている保護者は6割あまりになっている。	学校全体で、学習ルールの共通理解を図ると共に、授業開始前には、準備を済ませる、まじめに授業にのぞむ等、学習への姿勢を大切にしたい。小グループでの話し合いの場面を多く設けるなどして、学び合いを大切にしていきたい。
	子どもたちが「見方・考え方」を働かせて、主体的に問題を見だし、粘り強く解決策を考えることができるように授業改善している。	教職員も児童も80%以上肯定的に捉えているが、保護者の割合はそれよりも少し低い。授業のはじめには、学習課題を明確にし、見通しをもって学習に取り組めるよう努めている。しかし、1割程度の子どもたちは、既習を生かしたり粘り強く学習に取り組んだりすることに苦手意識をもっている。	校内研究の柱である生活科や総合の学習を中心に、課題設定から解決まで、子どもたちの興味関心を大切に、子どもたち自身が見通しをもって学習に取り組めるよう展開していく。そのために教材研究の充実、校内研修・校外での研修に積極的に参加するなどして授業力向上に引き続き努めていく。
	子どもたちが自分の意見を言ったり、友達の話や意見を最後まで聞いたりして、自分の考えを広げることができるように授業改善している。	「学び合い」をテーマに校内研究を進め、実践に示している。話し方の型や話し合いの進め方を示すなどして、安心して話ができるようにしている。また、友達の考えを聞くことがもたになってい	自信をもって自分の意見を言えるようにするための支援方法、友達と意見を交わすことで得られる思考の広がりや高まりを実感させられる指導方法等、学校全体で指導に力を入れていく。
	週4日昼の時間等を活用した「学習タイム」設け、基礎・基本(読む・書く・計算)の定着を図ったり、計画的に家庭学習に取り組めるよう具体的に提案したりしている。	基礎的な知識、基本的な技能を確実に習得させる取り組みを実践し、さらに知識・技能が定着するように計画的に宿題を出してきたが、児童の約2割が家庭学習に取り組めていないと回答している。取り組める児童と取り組めない児童とに二極化してきている。	引き続き、学校での学習内容の定着を図れるように宿題を出していくと同時に、授業の中でも、自分で学習計画を立て学習を進めることや授業の振り返りを通して自らやるべき課題を見いだせる取り組みが必要になっている。
	GIGA端末を活用した効果的な授業の在り方について、研修を重ねたり、具体的に情報交換をしたりしながら授業改善している。	学習での具体的な利用方法等について、外部講師を招いて研修を行った。学年間の差は多少みられるが、進んで取り組もうという意識は高まっている。	GIGA端末の重さ、家庭での支援の差もあり、低学年では毎日持ち帰れないケースもあるので、学習の進捗と合わせて持ち帰りも計画的に行っていく。
思いやりのある子	自分とは違う意見や少数の意見であっても、よさを認め大切にできるように指導している。	児童の82%が肯定的に捉えている。多様な意見を認め合い、友達のよいところを伝え合う活動を日常的に取り入れてきた。学級での話し合いだけでなく、クラブや委員会、代表委員会等の場でも引き続き力を入れていく。	学習においても遊びにおいても、子ども同士のかかわりは最も大切であり、教職員が常に意識して教育活動にあたっている。相手に認めてもらうことの安心感を感じ、自己肯定感が高まるようにしていきたい。
	いろいろな友達と一緒に協働して活動できるように指導している。	児童・保護者とも9割が肯定的に捉えている。教職員は、前項に続き10割が肯定的回答である。今年度は感染対策を取りながら、「どうすればできるか」を合言葉にグループ活動や協働的な活動、異学年交流など、かかわり合いを大切に教育活動を行ってきた。	友達と協力して活動することを楽しんでいる子が多い。なかよくすること、優しく接することが本校児童の一番よいところだと思っている。関わり合いに苦手意識をもつ子どもも増えてきているので、個々の状況に応じて丁寧に指導してきた。

思いやりのある子	命・心の教育	いじめは、どのような理由があってもしてはいけないということを様々な機会 で指導している。	児童91%、保護者96%、教職員100%と肯定的な回答が最も高い半面、「わからない」を含めた否定的な意見が、児童9%、保護者5%だったことが課題と感じる、職員自身が人権意識を強くもち、日々の教育活動で、繰り返し具体的に問いかけている。	前項に述べたように、友達にやさしくする、思いやるということは本校のよさである。ただ、この設問については、やはり100%を目指したい。教職員自身が子ども一人一人を大切にするという人権意識を強くもち続けたいし、保護者にももっと伝えていきたい。
	一人一人に応じた支援の充実	どのような子どもたちでも、居場所があり居心地がよくなるよう工夫している。	一人一人を大切に児童支援体制の充実を図り、個に応じた支援や教育相談を常に大切にできた。教職員の意識はそうであっても、児童の17%が「学校に行くのは楽しいですか」の設問に否定的な回答をしている。児童だけでなく、増加傾向にある支援が必要な保護者への対応についても課題である。	引き続き、個々の困り感への支援や保護者の教育相談の充実を図る。支援教育Coを中心に教職員が情報共有を密にしなが、個に応じた支援に努める。外部機関とも連携を図りながら、どの子どもにとっても学校は楽しい場所であると思えるよう努力をし続けたい。
明るく元気な子	あいさつ運動の推進	挨拶や言葉遣い、返事がきちんとできるように様々な場面で指導している。	登校時、毎朝、正門での挨拶を行った。朝会や学校便り等でも、挨拶の大切さや気持ちのよい挨拶についての話をした。児童・教職員の9割以上が肯定的に捉えている。日常的な言葉遣いについては、教職員自らが手本となれるよう心がけている。	校長や支援教育Coの朝の挨拶は、児童理解においても重要だと考えているので、継続して行っていく。今後も、挨拶や言葉遣いは、教職員自身がお手本となれるよう人権意識をもって、丁寧な言葉遣いを心がける。
	清掃活動の推進	身の回りの整頓や掃除をしっかりとできるように指導している。	全設問中、保護者の肯定的なスコアが5割を切り、最も少なかったが、児童本人は8割が肯定的に捉えている。学校生活においては、真面目に清掃活動に取り組む姿が見られるが、保護者は、家庭での様子も含めて整頓の部分で課題が多いと感じているようだ。トイレの使い方については継続的に指導している。	学校では、感染状況に応じて、感染防止に努めながら、臨機応変な清掃指導に努めている。机の中の工具箱や個人のロッカーの整理など、家庭でも自己管理できるような指導をしていきたい。トイレ等、公共の場所を使う人のことを考えて、きれいに使う指導にも力を入れていく。
	「大師小のよい子の約束」の徹底	「大師小のよい子の約束」をきちんと守るように指導している。	「大師小のよい子の約束」が、安心して楽しく学校生活を送るためにあるということを各学年に応じて指導・支援を行い、約束を守るようにしてきた。児童、保護者、教職員ともに9割以上が肯定的に捉えていてそのよさが定着しているが、感染症対策の内容も含め、見直しを図って児童が納得して守れる内容にしていく。	「大師小のよい子の約束」をスタンダードとし、次年度も引き続き指導・支援を行っていく。何故その約束があるのか、教師からのトップダウンではなく、その必要性を子どもたち自身が納得して守っていく。経験の浅い職員も多いので具体的に共通理解を図って進めていく。
	いじめの未然防止、早期発見、早期対応	子どもたちの言動、友達関係等の様々な変化を感じられるように一人一人に声をかけたり、観察したりしている。	全ての教育活動の中で、子ども一人一人を大切に児童理解を推進し、児童や保護者の困り感に対応することに最も力を注いできた。しかし、児童が21%、保護者が11%、困った時に相談できる人が居ないと回答している。今後も担任だけでなく、管理職や支援教育Co、学年等を含めたチームとして対応していく。	学校は、安全で、楽しく、一人一人が大切にされるところであるという当たり前のことを、引き続き大切にしていける。当事者意識、スピードは誠意、情報共有の三つを念頭に置き、支援教育Coを中心とした児童指導体制のもと、早期発見、早期対応に努める。児童理解の報告は、打ち合わせ毎に行っていく。
	安心して楽しく過ごせる学校づくり	効果測定の結果を活用し、よりよい人間関係を築くことができるように工夫している。また、今年度、民間の会社が実施している「グッドモチベーション」という調査を活用し、子どもたちの心情についてより細やかなアンケートを実施し、日々の児童指導に生かした。	昨年度より効果測定をGIGA端末を活用して実施しているが、今年度は新たに取組んだ「グッドモチベーション」では、児童一人一人のストレスの度合いや家庭での様子を含めた児童の心情を見取れるようになった。効果測定の結果や学校生活アンケートも踏まえ、豊かな人間関係づくりに努めている。	学校は楽しくて安心できる、自分の居場所があるということは、どの子どもにも不可欠なことである。日々の学校生活を注視するだけではなく、少しでも気になることがあれば進んで声をかけ、話を聞く、保護者に連絡するなどして、積極的にかかわっていく。

開かれた学校	家庭や地域との交流・連携	家庭や地域に対して、感染症対策をとりながら工夫して学校を公開している。また、地域の様々な方々と直接かかわる学習内容を計画し、子どもたちが直接見たり聞いたり体験したりできる場面を大切にしている。	学校教育に理解が深く、協力的な地域である。生活科や総合的な学習の時間を中心に、地域にあるお店、地域で活動するNPO団体、伝統文化を継承する方々と関わる活動を通して、自分たちの住む町に対する愛着が高まっている。次年以降も関係が続くよう、引継ぎをしっかりと行っていく。	コロナ禍ではあったが、感染症対策を取り、GIGA端末等も利用して活動内容を工夫することで多くの方々と直接かかわることができた。今年度関わった方々の資料をしっかりと次年度の学年に引き継いでいく。次年度は、コロナ禍以前に戻れるくらいの割合で保護者が来校できる機会を作っていく。
--------	--------------	--	--	--

学校関係者の評価	今年度の学校運営のまとめ・次年度へ向けて
<p>今年度は、6月と2月の2回、学校教育推進会議を開催できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめについてのアンケートで、児童だけでなく、保護者の中にも「絶対にいけない、とは思わない」との数値が出ていて驚いた。なぜそのような考えになるのか。</li> <li>・いじめの定義として、嫌なことをされた方がどう思うかが大事。子どもたちの意見をよく聞いて、大人も子供も考えていかなとなかなか直らない。難しい問題だ。</li> <li>・いけないことをしてしまった子どもに対しても、担任は味方であるようにしてほしいという校長の考えに賛同する。どのような家庭であっても、温かく迎え入れることができる社会でいたい。</li> <li>・150周年に向けた児童の取り組みの中で、記念の歌の歌詞に「大師の笑顔」が出てきたことがとても素敵に感じた。</li> <li>・学校生活の指針となる「よい子のやくそく」について、自分が気持ち良いだけでなく、周りの人も気持ちよく過ごせることが大事ということを理解してほしい。大人の社会にも通じること。小学校で学んでそのまま大人になってほしい。</li> </ul>	<p>・細かい内容については、各項目で記述してある通りである。</p> <p>次年度は、以下の点について重点的に取り組む。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①困り感をもった児童や保護者に寄り添えるように、支援教育Coを中心に、状況に応じてSCやSSWとも連携を図りながら児童指導・個別指導や教育相談の充実を図り、引き続き支援体制の強化に努める。</li> <li>②本校の強みである仲のよさ、やさしさを意識し、更に伸ばせるように、子どもたちに共感的・肯定的な言葉かけを心がける。</li> <li>③感染症対策を講じながら、交通安全、けがの防止など安全第一を考えた教育活動を推進する。</li> <li>④引き続き、気持ちのよい挨拶や相手のことを考えた言葉かけ・言葉遣いができるように指導を継続する。</li> <li>⑤令和5年10月に迎える150周年を念頭に置き、地域との連携を大切に、コロナ禍にあっても、方法を工夫しながらできる限りの交流を考えていく。</li> <li>⑥児童が増加傾向にあることと通学路の安全確保を鑑みて、今年度から指定変更可能地域を設定した。今後も数年後を見据えた中期的対策が必要になってくる。それを踏まえた施設等の環境整備を図りたい。</li> </ol>